

年間第 17 主日

ヨハネ 6・1 - 15

2021.7.25 高円寺教会 初ミサ
小田武直神父（町田教会助任司祭）

今日の福音箇所は、ヨハネ福音書の「五千人にパンと魚を分け与える」場面です。この出来事は、他の全ての福音書にも記されており、さらにマタイ、マルコ福音書の場合、二回も登場します。それだけ重要で、福音記者にとっても、とりわけ印象深い場面だったのだと思います。

イエス様は宣教活動の初め、多くの人々の病を癒し、悪霊を追放し、今まで世が知ることのなかった力強いみ言葉を語りました。そのようにして、イエス様は苦しむ人々のただ中に、神様の救いと力を表わしていったのです。今日の箇所は、そのようにイエス様が救い主として、多くの人々の注目を集め、群衆が押し寄せた、その最中に起こった出来事です。

イエス様はあまりに殺到する群衆を避けるように、ガリラヤ湖の向こう岸に渡られますが、群衆はその後を追って訪ねてきます。それだけ、癒しを求め、救いを求める人々に溢れていた当時の悲惨な状況があったのでしょう。マルコ福音書の並行箇所には「イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て、飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた」（マルコ 6・34）とあります。イエス様はその大勢の人々の飢えを満たすために、わずかのパンと魚を、多くの人々が満たし得る糧へと変える奇跡を起こされたのです。

さて、パンを分け与えられたという出来事から、キリスト者であればまず思い起こすことは、聖体の秘跡です。今日の箇所には、イエス様がパンを取り、感謝の祈りを唱え、分け与えられたとありますが、このことは後にイエス様が最後の晩餐で取られた動作と祈りに重なります。だから今日の箇所の出来事には、聖体の秘跡の制定を指し示すものがあると考えられています。

実際、聖体の秘跡が定められるのは、最後の晩餐の席上で、イエス様が食卓のパンとぶどう酒を、自らのからだと血として頂くようにと示されことによります。そこで強調されることは、何よりもイエス様の犠牲によるわたしたちの救いという点です。イエス様はまさに十字架につけられる前夜、自らが体をくだかれ、血を流すものとなって救いが実現されることを、パンとぶどう酒のうちに現して下さったのです。そ

れは神そのものがわたしたちの弱さ、惨めさ、はかなさの極致を担い、そのただ中に神の力を現して下さった出来事でありました。そのことによって、滅びに宿命づけられたわたしたちの世界に、それだけでは決して終わらない永遠のいのちを示して下さったのです。聖体の秘跡のうちには、人間の極限の闇を経験することを通して、光をもたらそうとする神の痛むほどの愛が込められています。

しかし今日の箇所の子千人にパンと魚を分け与える箇所には、そのような痛みや厳しさといった要素は控えられ、パンが増やされ、多くの人々が飢えから満たされた喜び、恵みのほうが強調されています。それはややもすると、超自然的な奇跡の出来事にのみ注目が向いたり、あるいは、単に食物を与えられた出来事としてのみ受け取られかねない危険をはらんでいます。

ですが今日の出来事は、イエス様が特別な祈りをもってパンを聖別しているように、まぎれもなく聖体の秘跡を指し示しているものです。それはイエス様の救いのみわざを表わすものとして、あの最後の晩餐で定められた聖体の秘跡と堅く結ばれたものです。イエス様が聖体の秘跡を定められたこと、十字架につけられたこと、それはわたしたちに対する無条件の愛によるものでした。わたしたちを罪と苦しみと滅びにつきまとわれたこの世の生から救い出すために、自らを投げ捨てて救いを実現して下さったのです。だからわたしたちがこのイエス様のように、自らを捨てて他の人と愛を分かち合うことにこそ、イエス様の最終的な望みがあるのです。

そう考えてみたとき、今日の箇所にある、いのちのパンによって多くの人々が満たされた出来事は、聖体の秘跡を準備するもの、であると同時に聖体の秘跡のうちに実現する実りであるともいえます。イエス様は今日の箇所において、単に食物であるパンを増やしてみせたということだけではなく、イエス様ご自身がわたしたちのために身を砕かれ、血を流される者となり、そのことによってわたしたちが新たに生きる者となることを、まさに五千人の食卓の交わりの中で表わして下さったのです。それは神の前では、満たされない飢え渴きを抱える、全ての人々に当てはまる救いです。

そのことを、今まさに苦しみのうちにある世界に証ししていくことができますように。わたしもコロナ禍の最中に叙階の恵みを受けたことの意味を深めながら、命の糧を伝える者となるよう励んでいきたいと思いをします。